

公共図書館の役割と蔵書，出版文化維持のために

【基調報告】

図書館界と出版界の協働

持谷寿夫

日本書籍出版協会図書館委員会委員長

株式会社みすず書房取締役相談役

はじめに

これまで、日本書籍出版協会と日本図書館協会は、全国図書館大会や、個別案件での情報交換や協力という関係を維持してきました。2014 年以降は、東京国際ブックフェアや図書館総合展といった公開の場による図書館シンポジウムや、全国図書館大会での分科会といった催しを中心に、出版界と図書館界の相互理解を深めるための活動を続けています。

これは 1970 年代以降発展をとげてきた図書館での読書の拡大が、単に出版社ばかりでなく、著作者、流通など出版の循環全体と深い関わりがあり、メディアが多様化するなかで、今後の出版と読者との関係を考えるうえで重要であり、図書館との協力関係を密にすることが、なにより必要であるという認識に立っているからでもあります。

それには、まず現在の図書館の実態や役割を知り、また、抱えている課題についての理解を深めること、一方で、図書館へ向けて、それぞれの多様な分野の出版活動がどういう構造をもっており、今出版業が直面している厳しい状況も率直に説明していくことから始めて現在に至っており、さらに相互の認識を深めるための方法を模索しようとしています。

出版からみる図書館の現在と課題

利用者への資料提供サービスの向上も進み、欲しい本がすぐに借りられる環境も整備され、「場」としての存在感や、他施設との連携などの地域社会教育施設の中核としての機能を持ち、住民の多様な要望を反映させ実現している図書館の存在は、ともすれば失われがちな地域の読書環境の充実に大きく寄与していることは、この間のシンポジウムでの事例報告や発表でも感じとることができます。

地域と密着した「まちづくり」という観点からも、昨 2016 年に日本図書館協会がおこなった「図書館

とまちづくり」の調査結果からも多種多様な活動がおこなわれていることがわかり、図書館の存在の大きさをうかがい知ることできるようになりました。

そうした図書館の活動のなかでもっとも切実な課題は、資料費はもとより、専門性をもった職員の方々の育成費用などを含む、図書館関連費用の不足であり、そのさらなる充実が必要になっていることは出版界も強く認識しています。

図書館関連費用増額要請

現在、日本図書館協会は文部科学省や関係の議員連盟、各自治体への関連費用増額要請活動を継続していますが、日本書籍出版協会もこの動きに協力し、図書館の存在の重要性を自治体のなかで高めることをアピールしながら、図書館関連予算の増額が実現しやすい環境を作るための要請活動をおこなっています。

基盤としての図書館資料と今後

同時に、出版界は図書館の重要な資産である資料に対しても図書館との間でどのような協力が可能かを考え続けたいと思っています。各図書館での自立した選書のためにどのような情報提供が適当なのか、社会構造やメディア環境激変のなかで、知識世界の普遍性や多様性を将来の読者へ保証する存在としての図書館の役割には、市民ばかりでなく、出版の循環に関わるものは大きな期待をもっています。主に大都市部の図書館で過度なリクエストが一部の書目に集中していることや、比較的安価な書籍の購入が増加する傾向に対しての懸念の声も出版界にはあります。選書についての議論の場が図書館側で用意されれば、ぜひ出版界も参加したいと考えています。さらに、その議論が個々の図書館への主体的な蔵書構成の役に立てることができれば、とも思っています。

図書館界と出版界は、それぞれの地域での協力とともに、今後も読書環境整備のための活動を続けていきたいと考えています。同時に両者をつなぐ存在としての「本」＝「資料」への理解も深めていくための継続した活動も重要と感じています。

出版文化維持のために

今回は、出版と図書館の関係の現在と今後の方向を、慶應義塾大学文学部 根本彰教授から示唆をいただくとともに、文芸書系出版社の出版の構造と図書館との関係を、文藝春秋松井清人社長に、さらには総合専門書出版社の立場から、図書館との関係を岩波書店岡本厚社長にお話ししていただくこととします。

出版と図書館のより良き関係構築のための議論をさらに深めていきたいと考えています。

【報告】

出版と図書館を考える

根本 彰

慶應義塾大学文学部教授

これまでの議論

出版と図書館をめぐるこれまでの議論を振り返ってみる。

まず、出版物売上げが継続的に減少していることがあげられる。書籍だけにとっても 1997 年をピークにしてそれから 20 年で 29% の減少となっている。また、それと密接に関わるものとして、書店数の急激な減少がある。

その原因探しとしては、インターネットによる情報提供が日常的な行動になっていて、とくにスマートフォンや携帯タブレットが誰もが持ち運ぶ情報機器になったことが挙げられる。また、出版物流通において、ネット通販、とくにアマゾンが大きな市場を形成している。これは、出版物のネット依存に拍車をかけるものになっているが、期待された電子書籍流通はそれほどの市場を占めることはできていない。それもコミックが市場の 8 割を占めると言われている。

この間、一部の作家および出版社から、図書館の資料貸出サービスを問題視する意見が出された。図書館の重要性は認めつつも、新刊書の複本をどんどん貸し出すサービスは書籍売上与著者の印税収入に影響を与えている可能性があるという意見である。半年、ないし 1 年間、貸出しをしないことを依頼する文面を書籍に明記したり、その趣旨の発言を行うことがあった。

日本図書館協会と日本書籍出版協会は「貸出実態調査 2003」を実施して、ベストセラーや各賞受賞作

品の新刊書籍が図書館でどの程度借り出されているのかを調査した。その結果は、発行後 3 年以上が過ぎた本の図書館提供率（貸出数÷（貸出数+発行部数-所蔵数））が一部の書籍で 5 割を超えるものがあったが、発行後 1 年のものだと多くて 2～3 割であった。数値で見ると、図書館が市場を侵食しているとはいえないとして、この調査は議論を冷却する効果があった。

同じ頃、文化庁では、著作権者の権利を保障する観点から公共貸出権（公貸権）の制定の検討を行った。しかし、これも権利を制度化するところまで議論が進まないままに現在に至っている。

2010 年代に入って、図書館の貸出サービスに対して、再度、作家や出版関係者が発言することが増えている。2015 年には、日本文藝家協会主催のシンポジウムで著作者から貸出中心にすべきではないという要望が伝えられ、同年秋の全国図書館大会での新潮社社長佐藤隆信氏の「図書館の貸出によって増刷できなかったものができなくなり、出版社が非常に苦労している」という発言があり、それを報じた朝日新聞記事をきっかけに図書館の貸出が話題になった。10 年前の再現であり、議論はあまり進展していないように見える。

その後の議論

① 計量経済学的研究が行われ、図書館は出版物販売に負の影響は与えていないとの結果が出されている。

2012 年に中瀬大樹（政策研究大学院大学）は、全国の都道府県と関東地方の市町村の貸出数と出版物販売数のデータを用いた統計学的分析を行い、都道府県データでは有意な影響関係は認められず、市町村データでは図書館の貸出が多いと出版物販売に正の影響があるとした。

2016 年に浅井澄子（明治大学）及び貫名貴洋（広島経済大学）は、別々の研究で、図書館の貸出数が書籍販売額に与える影響を計量経済学的手法で分析した。それぞれ、貸出数の増加が販売数の減少に影響しているように見えるが、これは「見せかけのもの」であり、データを補正する手法を導入して詳細に分析した結果、因果関係は認められなかったとしている。浅井は「公共図書館は、書籍販売に大きな影響を与えるプレイヤーではないと判断される」とし、貫名は「両者（図書館貸出冊数と書籍販売金額）の間に、因果関係の

タイトル	文学賞・文芸賞	本屋大賞順位	文学ベストセラー	所蔵自治体	所蔵館	大学所蔵館	X市冊数	X市貸出累積	Y市冊数	Y市貸出累積	
2014 春の嵐	芥川龍之介賞第151回		2014-49		51	340	395	8	208	5	139
2014 サラバ! 下	直木三十五賞第152回	12-2	2014-5		51	387	545	19	836	10	305
2014 サラバ! 上	直木三十五賞第152回	12-2	2014-5		50	383	545	19	778	10	388
2014 九年間の祈り	芥川龍之介賞第152回		2014-40		53	341	381	9	177	5	96
2014 絶門	直木三十五賞第151回		2014-14		51	347	357	9	407	5	274
2015 スクラップ・アンド・ビルド	芥川龍之介賞第153回		2015-8		51	360	459	9	297	6	180
2015 つまをめぐらば	直木三十五賞第154回				51	338	337	8	252	5	167
2015 火花	芥川龍之介賞第153回	13-10	2015-1		50	384	646	35	1052	16	460
2015 流	直木三十五賞第153回	13-8	2015-7		53	368	476	20	595	8	251
2015 水曜日の凱歌	芸術選奨第66回				53	269	31	8	187	4	95
2015 虚人の星	毎日出版文化賞第70回				51	173	25	6	50	3	30
2015 太陽は雲を失う = THE SUN AL	芸術選奨第66回				51	184	10	7	57	3	46
2014 ペンギンが教えてくれた物理の	毎日出版文化賞第68回				50	200	233	3	36	1	18
2014 聖徳の科学者 = STAP細胞事件	大宅壮一ノンフィクション賞46回				49	279	422	8	167	4	89
2015 チャップリンとヒトラー = メ	サントリー学芸賞2015年				48	104	226	2	31	1	11
2015 断崖伝書塔 = 忘れられた遺骨	大宅壮一ノンフィクション賞47回				48	103	125	2	7	1	16
2014 京都	毎日出版文化賞第69回				47	114	46	1	17	1	12
2014 先達国・精進の墓標 = 少子高齢	サントリー学芸賞2014年				47	84	338	2	30	1	15
2015 イスラム圏の衝撃	毎日出版文化賞第69回				45	143	253	7	110	3	24

タイトル	本屋大賞順位	文学賞・文芸賞	文学ベストセラー	所蔵自治体	所蔵館	大学所蔵館	A市冊数	A市貸出累積	B市冊数	B市貸出累積	新聞書 番組紹介数	
2014 その女アレックス	12-1翻				51	355	161	14	441	5	157	3
2014 鹿の王 下 (還って行く者)	12-1	日本医療小説大賞第4回、	本2014-3		52	384	555	20	831	10	334	5
2014 鹿の王 上 (生き残った者)	12-1	日本医療小説大賞第4回、	本2014-3		50	382	563	23	851	10	384	5
2014 サラバ! 下	12-2	直木三十五賞第152回	2014-5		51	387	545	19	836	10	305	4
2014 サラバ! 上	12-2	直木三十五賞第152回	2014-5		50	383	545	19	778	10	388	4
2014 ハリー・クバート事件 下	12-2翻				50	157	35	3	48	1	18	0
2014 ハリー・クバート事件 上	12-2翻				49	155	35	3	50	1	17	0
2014 ハケンアニメ!	12-3				52	330	308	10	334	4	140	3
2014 ペナンブラ氏の24時間書店	12-3翻				49	171	158	1	31	2	32	0
2014 火星の人	12-3翻				44	102	38	3	86	1	31	1
2014 窓から逃げた100歳老人	12-3翻		2014-36		49	282	239	8	228	4	95	4
2014 本屋さんのダイアナ	12-4				49	302	297	10	384	4	178	2
2014 土境の花	12-5	日本推理作家協会賞第68回	2014-34		50	335	197	11	324	6	234	0
2014 怒り 下	12-6				51	331	210	9	539	5	237	3
2014 怒り 上	12-6				52	333	210	9	543	5	257	3
2014 満願	12-7	山本周五郎賞第27回	2014-13、2015-18		51	366	350	20	863	7	369	2
2014 キャプテンサンダーボルト =	12-8				49	346	271	14	329	5	107	4
2014 アイネクライネナハトムジク	12-9		2014-18		50	344	364	18	643	7	232	2
2014 億男 = Million Dollar Man	12-10		2014-44、2015-21		50	355	272	16	456	7	198	1
2015 書店主フィクリーのものがたり	13-1翻				48	168	121	5	41	1	19	1
2015 羊と鋼の森	13-1	本屋大賞第13回			53	369	525	22	530	12	245	4
2015 君の隣をたべたい	13-2		2015-6		51	355	492	17	439	8	185	3
2015 紙の動物園	13-2翻				48	185	97	4	69	2	34	2
2015 国を救った数学少女	13-3翻				50	188	142	5	95	1	18	1
2015 世界の果てのこどもたち	13-3				51	224	277	6	149	3	58	4
2015 服従	13-3翻				48	178	159	4	80	1	18	6
2015 歩道橋の魔術師	13-3翻				47	84	104	3	31	1	8	3
2015 永い言い訳	13-4				52	321	252	7	294	4	142	5
2015 朝が来る	13-5				52	351	298	17	553	6	182	2
2015 王とサーカス = KINGS AND CI	13-6		2015-44		52	343	269	9	312	5	131	5
2015 戦場のコックたち = Armed wi	13-7				51	304	248	7	181	4	71	1
2015 流	13-8	直木三十五賞第153回	2015-7		53	366	476	20	595	8	251	7
2014 教団X	13-9		2014-11		52	355	325	15	517	6	209	4
2015 火花	13-10	芥川龍之介賞第153回	2015-1		50	384	646	35	1,052	16	460	12

存在を認めることができなかった」と述べている。

セラーリスト上位に入るようなものの以外の複本数・貸出数は多くないことがわかる。

② 新しい調査によって考えてみよう。

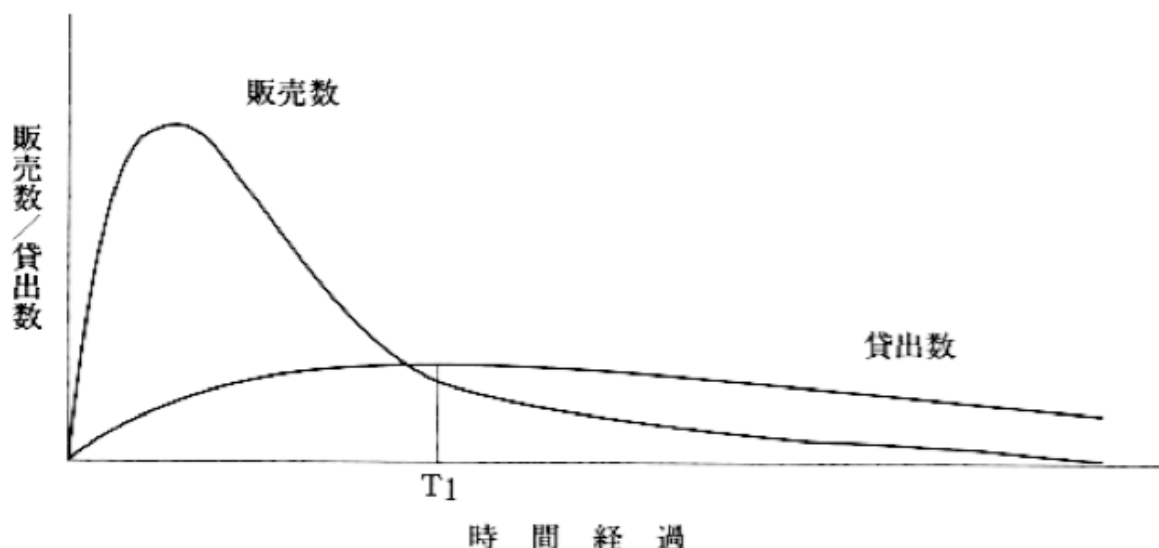
伊藤民雄 (実践女子大学図書館) は、首都圏の2市立図書館 (A市は8館+BM, B市は4館+BM) の芥川賞・直木賞受賞作と本屋大賞受賞作品 (いずれも2014年度, 2015年度) の所蔵および累積貸出数 (2017年春の時点) を調べた。とくにA市は図書館サービスの充実ではよく知られたところである。

A市, B市ともに, まんべんなく受賞作品を所蔵しているが, 複本が入っているのは特定の本だけである。それも財政的な制約もあり, かつてのように1館で多数の複本をもつことができない。ここで, 1館平均3冊以上入っているのは, 又吉直樹『火花』だけである。それ以外の受賞作品は1館1冊も入っていないものがほとんどである。貸出は, 所蔵数と対応していて, 要するにベスト

③ 販売曲線と貸出曲線の関係について考える。

芥川賞・直木賞はどちらかという新人作家の作品であり, 本屋大賞はプロのエンターテインメント系作家が書く本が多く入っている。複本による貸出が問題になったのはこのうちの後者で, プロ作家の発行後まもない時期の貸出を抑制したいという発言が多かった。これまででは, 確かにあまりこういう著書がどのように貸し出されているのかについての調査データが多くない。

出版後の立ち上がりにおいて, 書店に並ぶものに対して, 図書館はどうしても後追いになる。1自治体での購入は1冊から始まることが多く, 需要が見込めそうな著者のものなどが数冊入る程度である。あとは, リクエストが入るのに対応して購入していくので, どうしてもタイムラグが生



じる。利用者にとってはリクエストした書籍が入手できるまでにはかなりの時間（早くても数ヶ月、遅いと1年以上）がかかる。

これを次の図（根本 2004 p.21）で見ると、販売数と貸出数は一般的に図のような分布になる。これはベストセラー的なものを念頭においているが、高さの違いだけで、両者の関係は類似している。図書館がゆっくりと時間をかけて著作物を伝達する機能があることがわかる。

確かに、出版後、間もない時期でも一定の貸出数があることは事実である。だが、図書館がもつ遅延的な文化作用は、時間をかけて読者（＝消費者）を形成することに結びつく。

④ 図書館サービスの拡がりをはっきりしてきている。

図書館は、資料提供を核にして、レファレンスサービス、障害者支援、子ども読書推進、学校支援、広場・出会いの場づくり、課題解決支援、生活支援（コンシェルジュサービス）などの多様なサービスを行う方針が明確になってきている。2012年の文科省「図書館の設置及び運営の基準」が出てこうした方向が確認されている。

参照文献

浅井澄子「公共図書館の貸出と販売との関係」『InfoCom Review』Vol.68, 2017.
 伊藤民雄「出版流通と図書館：東京都の公立図書館の調査を通して」図書館問題研究会 64 回研究大会 第 4 分科会（2017 年 6 月 26 日）発表資料
 中瀬大樹「公立図書館における書籍の貸出が売上に与える影響について」2011 年度政策研究院大学大

学院 修士論文 <http://www3.grips.ac.jp/~ip/paper.html#paper2011>

貫名貴洋「図書館貸出冊数が書籍販売金額に与える影響の計量分析の一考察」『マス・コミュニケーション研究』No.90, 2017.

根本彰『続・情報基盤としての図書館』勁草書房, 2004.

【報告】

文芸書系出版社の立場から図書館を考える

—文庫は借りずに買ってください—

松井清人

（株式会社文藝春秋社長）

低迷する文庫市場

「文庫」の売上げが大幅に減少しはじめたのは 2014 年のことでした。出版科学研究所によれば、販売金額で前年比 6・2%、販売部数では 7・6%の減少。15年には金額で 6・0%、部数で 7・0%の減少。16年には金額 6・2%減、部数 7・2%減と、まさに減少の一途を辿っています。今年も凋落に歯止めがかからないどころか、さらに加速しているのではないかと。それが、われわれ文芸書系出版社の偽らざる実感です。

確たるデータはありませんが、近年、文庫を積極的に貸し出す図書館が増えています。それが文庫市場低迷の原因などと言うつもりは毛頭ありませんが、まったく無関係ではないだろう、少なからぬ影響があるのではないかと、私は考えています。

「文庫」は文芸系出版社を支える屋台骨です。多く

の版元にとって収益の大きな柱となっている。わが文藝春秋でも最大の収益部門は文庫であり、収益全体の 30%強を占めています。これは、「週刊文春」「文藝春秋」という、長く部数トップの座を保っている雑誌をも上回る数字なのです。

文庫市場の凋落は版元にとって死活問題であり、なによりも著作権者＝作家にとってこの上なく深刻な事態であると言わざるを得ません。実際、著名な作家たちから「文庫が売れない」「増刷がかからなくなった」という切実な声が、われわれ版元に届いているのです。

出版社の 6 つの機能

出版界にデジタル化の波が押し寄せてきたころです。たしか 7 年前のこと。著作権の第一人者である福井健策弁護士は、あるセミナーで「デジタル化の時代にどんな出版社が影響力を保ち続け、生き残ることができるのか」という話をしました。「そもそも出版社には 6 つの機能がある」と福井弁護士は言います。

- ① 発掘・育成機能 フィクション、ノンフィクションの雑誌などを通して、作家・書き手を発掘して育てる。
- ② 企画・編集機能 作品の創作をサポートし、時にリードする。
- ③ ブランド機能 著名な文学賞や強力な雑誌媒体の信用によって、作家や作品を紹介、推奨する。
- ④ プロモーション・マーケティング機能 作品や雑誌を宣伝し、様々な販路を通じて展開する。
- ⑤ 投資・金融機能 ①から④までにかかる様々なコストと失敗リスクを負担する。
- ⑥ マネジメント・窓口機能 映像化など作品の二次展開において窓口や代理を勤める。

以上 6 項目のうち、最低何項目を満たせば、影響力のある出版社、すなわちデジタル化の荒波の中で生き残れる出版社たりえるのか。福井弁護士は、規模の大小にかかわらず、「1 項目も欠けてはならない。6 項目すべてを満たさなければならない」と言うのです。

文芸誌も単行本も赤字

文庫というのは一つの作品の、いわば「最終の形態」です。文芸作品が文庫化されるまでには、雑誌掲載（あるいは文学賞に応募）→単行本化→文庫化という基本的な流れを辿ります。その過程で版元は、

先述の 6 つの機能を果たすために、多くの「人と時間とコスト」を注ぎ込むのです。

文藝春秋を例にとれば、通常、才能ある書き手の文芸作品を世に送り出すとき、純文学なら「文學界」、エンタテインメントなら「オール讀物」という文芸誌に掲載します。そこを出発点とし、選ばれた作品が単行本となるわけですが、文芸誌の読者はずっと以前から激減していて、それぞれ年に億単位の赤字を余儀なくさせています。

単行本とて事情は同じです。高名な文学賞を受賞してベストセラーになる作品はごくわずか。小社ではノンフィクション、フィクションを併せて月に平均 20 点の単行本を発行していますが、驚くなかれ、黒字になるのは 10%から 20%、つまり 20 冊のうち 2 冊から 4 冊しか黒字にならないのです。

それでも、われわれ文芸系出版社は本を出し続けます。出さなければならない本、後世まで残していかななければならない作品があるからです。それが文芸系出版社の矜持、と言ったら大仰でしょうか。

良書を刊行し続け、作家を守り、そして版元の疲弊に歯止めをかける。そのために必要なのが、文庫が生み出す収益といっても過言ではありません。文庫は廉価ですが、だからこそ購入しやすい。発行部数も桁違いに多いし、販売期間は長期に及ぶ。読みたい作品が単行本から文庫化されるのを待つ読者も沢山いるのです。

繰り返します。文庫市場の低迷は、版元にとっても作家にとっても命取りになりかねない重大事なのです。

図書館が教えてくれた

私は幼稚園の頃、母親に連れていかれた図書館で、初めて本に出会いました。小学校に上がってからは、近所の本好きの友だちと、土曜日の午後と日曜日の大半を図書館で過ごすことになる。本の面白さを教えてくれたのは、間違いなく図書館です。

やがて地域の野球チームに入ってスポーツに打ち込んだ私は、図書館から遠去かります。そして中学 2 年の夏休み、ふらっと入った街の書店で、初めて自分の小遣いで本を買います。エラリー・クイーンの「Y の悲劇」、東京創元社の文庫本でした。2 ヶ月後、同じ本屋で、いまでも自室の本棚に並べてある大切な本を購入します。ウィリアム・ゴールディング「蠅の王」、新潮文庫の一冊です。

高校に入る頃には、自分だけの小さな本棚に 100

冊を超える文庫本が並びました。わずかな小遣いをためて本を買い、書棚に並べる喜びを教えてくれたのは、文庫本でした。

出版文化を共に支えてくださる公共図書館をお願いします。どうか文庫の貸し出しをやめてください。それによって文庫の売上げが大幅に回復するなどは思っていません。図書館では文庫は扱っていない、それなら本屋で買うしかない、文庫くらいは自分で買おう。そんな空気が醸成されていくことが何より重要なのです。

最後に本と図書館を愛する読者の皆さまへ。

文庫は借りずに買って下さい！

【報告】

専門書系総合出版社の立場から図書館を考える

岡本 厚

(株式会社岩波書店社長)

はじめに

専門書系総合出版社としての発言ということだが、岩波書店は、雑誌から、新書、文庫、単行本、児童書、辞典まで手掛ける「総合出版社」である。もちろん、講座や全集など、多くの専門家を编者、著者として組織し、相当の準備期間を経なければ刊行出来ない企画や、著者が人生をかけて探求した成果を盛り込んだ浩瀚な学術書などは、岩波書店にとって非常に大切な刊行物と位置付けられている。

岩波書店では、「単行本」セクションの一部門として「学術書」がある。「学術書」は、読者対象が専門家や専門家予備軍を予定し、部数も少なく（1000部内外、それ以下の時もある）価格は高い。（岩波書店では、「学術書」以外に、「学術一般書」「一般書」と読者対象によって分けている）

自然科学書でいえば、毎月刊行している「科学ライブラリー」は、一般の読者を対象とし、部数も多く価格も安い、同じシリーズであっても「数学叢書」などは、専門家ないし専門家予備軍を対象とし、テーマは専門的であり、少部数・高価格である。

最近では、市場の動向を踏まえ、出来るだけ部数・価格の設定にメリハリをつけようとしている。中間の学術一般書と名付けたジャンルに、かつてほど読者がいなくなった気がする。「教養層」ともいべき読者が減っている。

様々なジャンル・分野、学術（専門）と一般、な

ど多様な出版を行い、それぞれに読者を獲得していくのが、岩波書店のビジネスモデルといえる。

出版者と図書館

図書館は、読者と本の「出会い」の場であり、知のアーカイブである。出版社にとっては、読者を育ててくれる場であると同時に、本を買ってくれるお客様でもある。

さて、学術書（専門書）は、内容的に専門性が高く、正確性が高く要求されるため、編集や校正作業には労力も時間もコストもかかる。一方で、苦境にある書店さんにとっては、回転の悪いジャンルの書目ということになり、敬遠されることになる。

そういう学術書は、このところ急速に売れなくなってきている。数年前、米国の研究者から、米国における学術書は、300～500部と言われ、大学などの助成なしに成り立たなくなっていると言われたが、日本においてもほとんど同じような傾向になってきた。要因としては、大学の問題などがあると思うが、それはまた別のテーマである。学術書を出版する出版社にとって、図書館は、これまで以上に販路として期待されることになる。文庫や新書などは、価格も安く、一般の読者に多数買っていただかなければ成り立たないジャンルである。図書館で借りて読まれることはあまり想定していない。一方、専門書、学術書や講座、全集などは、価格も高く、一般の読者というより、図書館などに置いていただき、多くの読者が手に取れるようにしてもらいたい、というのが出版社としての思いである。

岩波書店の場合は、相対的にいえば、多くの図書館によく買ってもらっていると考える。

図書館流通センター（TRC）のデータを見ると、ジャンル別では、岩波の場合、児童書がもっとも多く、次いで単行本、新書、文庫となるが、意外に全集や講座などは少ない。最近のデータで見ても、講座・シリーズ・全集などは、50～100部程度、日本歴史など、読者の多い講座でも、200～300部程度である。もちろん順次部数は増えており、またTRC経由でないもの（外商経由など）もあるだろう。しかし全体の傾向はうかがえる。

単行本では、1000～2000部が納められることがあり、比較的安価で、かつ話題になったものが多いようである。

つまり、図書館の購入傾向は、書店などとほとんど同じに見える。購入費の限界、貸出数や利用者の

要望などを考慮すると、当然そうなるのは分かるが、出版社としての期待とはかなり違うことになる。

学術書の出版を続けるために

くり返すが、岩波書店の刊行物は、公共図書館においても大学図書館においても、相対的に多く購入いただいている。

そうではあっても、売り上げの厳しさが続くと、専門書、学術書の刊行は次第に難しくなっていく。労力もコストもかけて作ったものが、はじめに想定した部数が売れず、在庫が積みあがることになると、作る側（著者、編集者）の意欲は減退するし、出版社の経営を圧迫する。

実際、岩波書店においても、この傾向の中で、学術書はかつてより部数を絞らざるを得ず、価格も高くつけることが多くなっている。

それは、日本の学術世界や知的世界にとって果たしていいことなのか、という問題にもつながろう。

また、図書館でこそ生まれる、本と読者の多様な「出会い」が損なわれることになるのではないか。自分自身を考えてもそうだが、若いころは本を買う余裕がなく、図書館に行って、高額の本や全集などを手あたり次第、借りて読んだものだ。それが、やがては本を買うという習慣につながっていく。

図書館では、書店に行っても置いていない、あるいは置いてあってもなかなか手の出ない本との出会いがあることも、その存在意義の一つなのではないだろうか。

とはいえ、出版社の側が、図書館に出版情報を提供するなど、積極的な働きかけをしているかと言われるれば、とても十分ではなく、模索中といえる（岩波書店は、毎月「新刊案内」を送っている）。

既刊書、POD など

岩波書店は、過去数多くの学術書、専門書、全集などを出版してきた。品切れになっているものも多いが、なお在庫のあるものもある。こうした既刊書についても、図書館の注目がほしい。内容的に決して古びておらず、十分に読む価値がある。

一方、こうした書籍は、増刷をかけると長く在庫を持たざるを得ず、品切れのままにせざるをえないものも多かったが、最近、オンデマンド出版（POD）の技術が上がり、また要望も多く、岩波書店では毎月 15 点程度刊行している。全集、著作集の欠本も、これで補充することもできるようになった。

また新日本古典体系など、100 巻にもおよぶ大きな刊行物をデジタル化し、内外の図書館に販売する事業も始めている。出版社としては在庫を持たずにすみ、図書館は収納スペースの節約にもなる。まだ電子に対応した図書館は少数だが、今後その数は増えていくだろう。

学術書、専門書は、その専門の読者にとっては必要不可欠なものであるのみならず、日本の知識社会の基盤となり、維持発展のためにも必要なものである。

学術書、専門書の刊行を続けていくために、出版社と図書館はどういう連携、協力が可能か、模索していきたい。

第 103 回全国図書館大会ホームページ掲載原稿

作成 2017 年 8 月 29 日

更新 2017 年 9 月 14 日